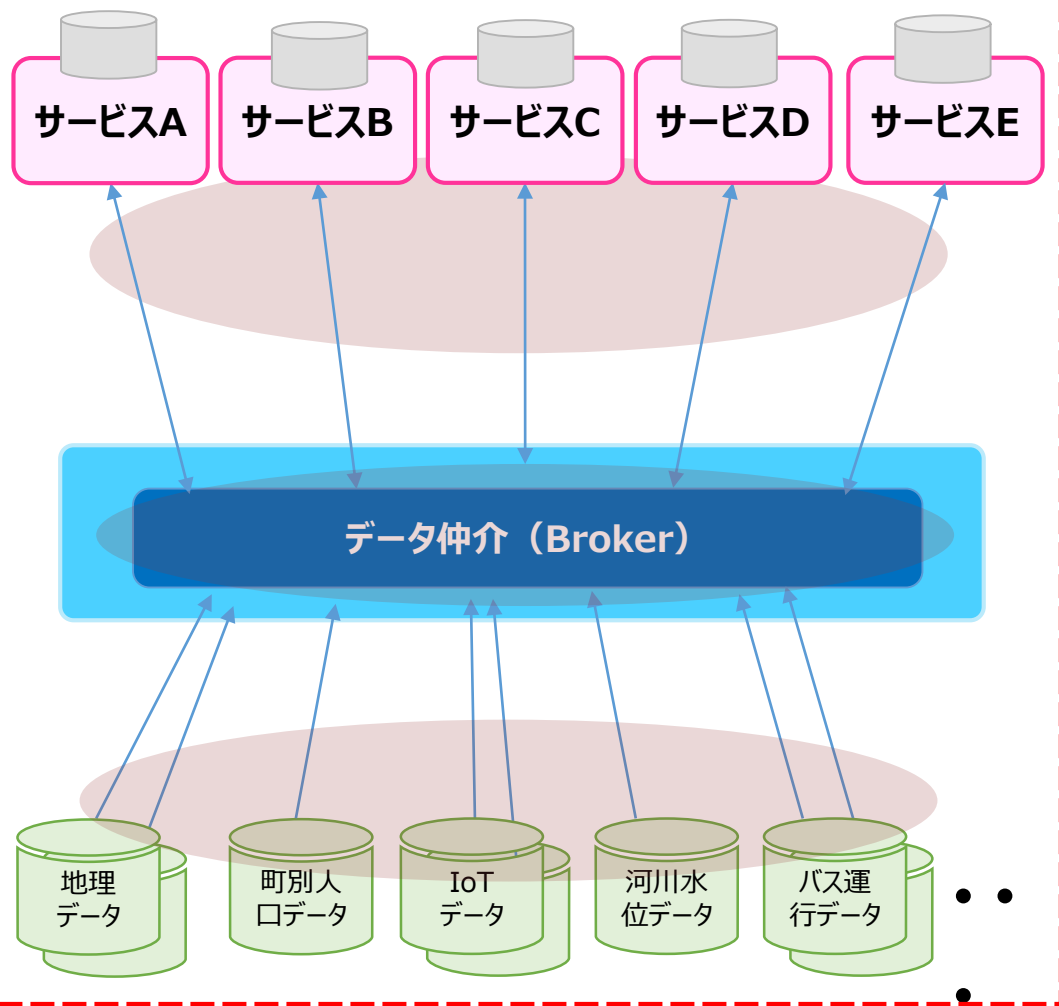


「データ連携基盤」の基本的な考え方

- スーパーシティでは、異なるサービスの間でのデータの連携・共有を実現するに当たり、一元的にデータを保有・管理する「必要な時に、必要な人に、リアルタイムに必要なデータの受け渡しを行う」**データ分散方式を志向することとする。**
- 個人情報保護をはじめとする情報管理のためのコンセンスマネジメントについても、できるだけリアルタイム処理を志向することとする。

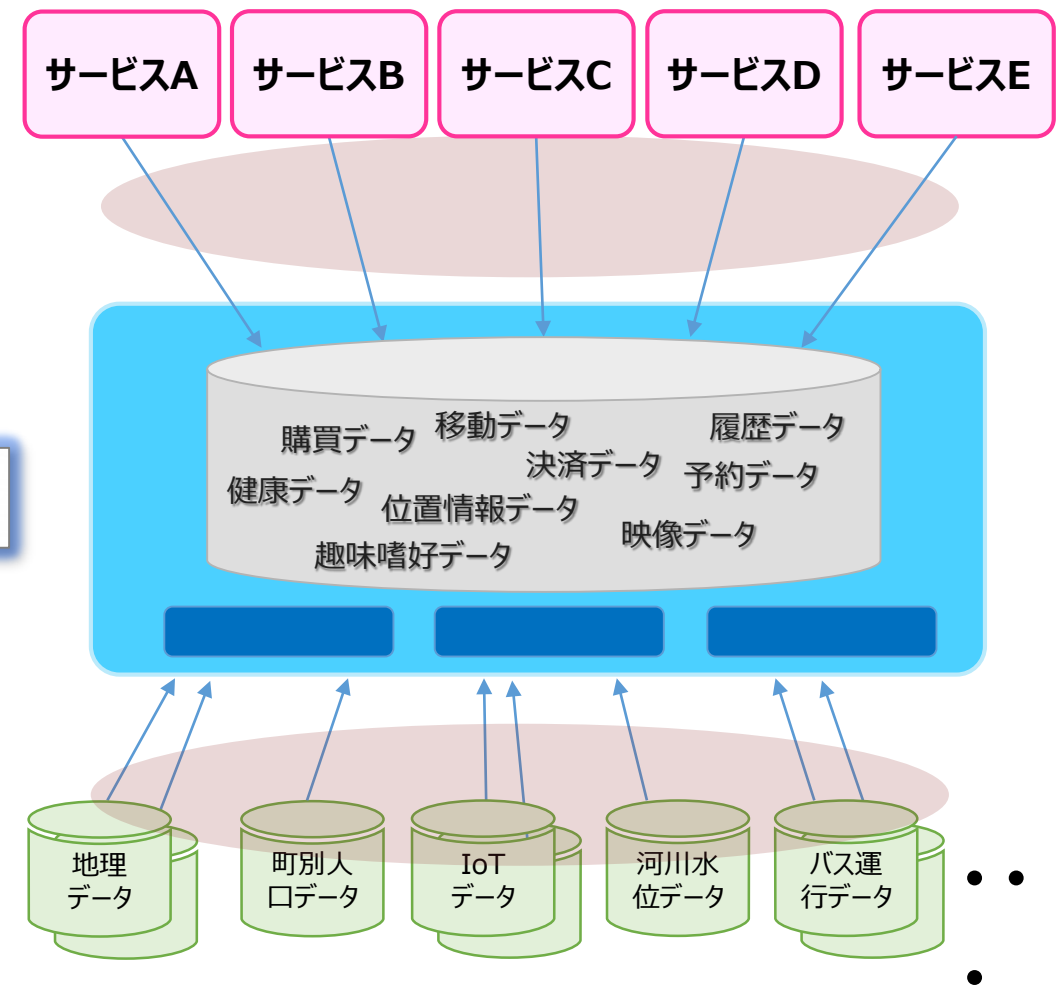
「データ分散方式」



サービス

データ
基盤データ
ホルダー

「データ蓄積方式」



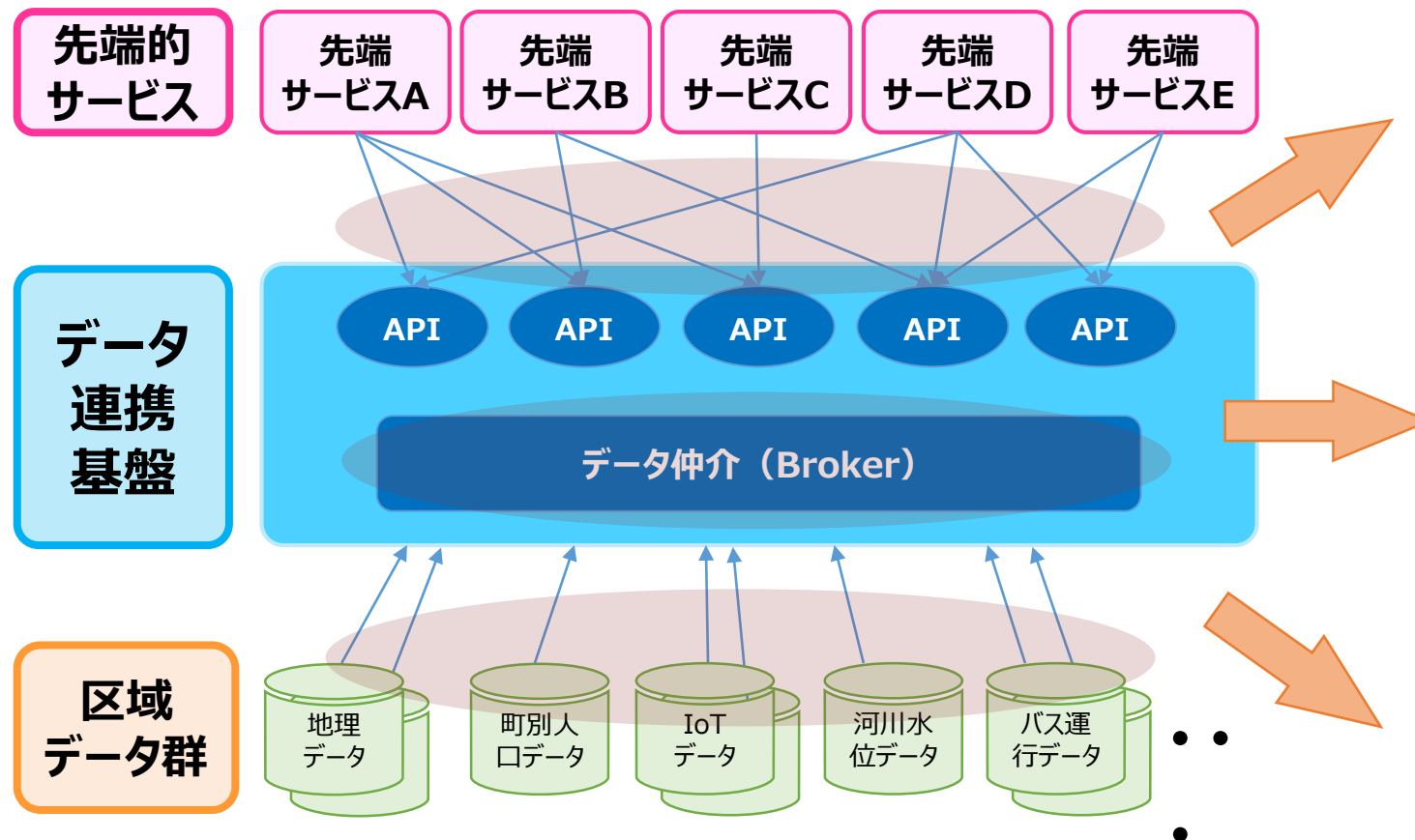
SIP 戦略的イノベーション創造プログラム
Cross-ministerial Strategic Innovation Promotion Program

(分野間データ連携基盤技術)

※基本は「データ分散方式」としつつ、災害対応や、地域から求められる機能を提供するために最低限必要となる蓄積や、ビッグデータを解析する場合などは例外的に蓄積を許容する。
(当然、必要となるコンセンスマネジメントを徹底する。)

「データ分散方式」を前提とした場合のBrokerにおける課題

- データの連携は、必要なときに、必要な情報のみを、「BrokerまたはBrokerと同等な機能」（以下Broker）を介して、データの仲介を行うこととする。
- なお、データ仲介の効率性・信頼性を維持するため、「Broker」の性能ばかりでなく、「データモデル」や「API」に関する共通の役割分担やルールを設定することも考えられる。
- このため、全体として効率的な「データ分散方式」によるデータ連携を実現するため、「Broker」、「データモデル」、「API」が三位一体となって全体最適なデータ連携基盤を構成するよう、検討を進めることとする。



③API

原則は自由だが、一部、APIの共通化や、APIによるデータ変換等を活用した、Brokerの負荷軽減方策も検討する。

ただし…

①Broker

連携の対象となる先端サービスのユーザや、サービスメニューのオプションの増加に適切に耐えるよう、冗長性、信頼性を確保した設計を目指す。

ただし…

②データモデル

データモデルの標準化により、取り扱うデータの種類を減らすことにより、ビジネスの自由度を奪うこと無く、ブローカーの技術的な負荷の軽減を目指す